

## 就職活動の経験から

総務省総合通信基盤局電気通信事業部料金サービス課

笹本 将吾

「笹本は総務省に勤めるのか、意外だな。」これが、私が就職活動を終えた際の友人たちの典型的な反応でした。

もともと私は大学院で経済政策や国際分野などの政策立案・運営を分野横断的に学ぶ一方、インターン生としてベンチャー企業で就労体験を得ていました。こうしたバックグラウンドの中で、自身の仕事への価値観として「若いうちから責任ある仕事を任される、成長できる環境」、「スピード感があるフラットな組織」という軸を掲げ、就職活動をしていました。こうした軸は、周囲から見ると民間企業にこそふさわしく、国家公務員という職業には似つかわしくないとと思われるのかもしれません。

当初私自身も民間企業の就職活動に取り組み、修士1年の冬から春にかけての最盛期には毎日のように企業説明会や面接に参加しました。そんな折、「軽い気持ちで」参加した総務省の業務説明会がきっかけで、「総務省」という選択肢も悪くないのではないかと思い始め、官庁訪問などで政策の第一線にいる方々の話を聞いた結果、総務省こそが自分の「成長できるか」「フラットな組織か」という軸にフィットしていると自信を持って決断することができ、現在に至っています。

## ■入省してどう感じたか

自信をもって選んだ総務省という選択肢ですが、実際に入省し、働いてみて、私の就職活動の軸は満たされているのでしょうか。この問いには自信を持って頷くことが出来ます。

私が所属する料金サービス課は、携帯電話等の料金制度の立案を通して、電気通信市場の公正なルール作りを担う部署です。ルールを作る以上、その責任は重大で、料金サービス課の政策の一つ一つが市場に大きな影響を与えることとなります。一方、電気通信市

場は激動の連続で、刻一刻と状況が動いていくため、こうした変化に対応するためには、行政の側も柔軟な組織を形成することが求められます。そうした中、役職を問わず課内全員が「よりよい制度を作っていきたい」という熱い思いのもと問題に取り組み、解決に向けて知恵を出し合い、協力し合っていく。そういう気風が自然と育まれ、新人であっても、大きな責任を負う課題に対して臆することなくぶつかっていくことができる土壌がここにはあります。それはまさに私が就職活動において目指した環境でした。

例えば、私が入省して携わった業務の一つに、NGN(次世代ネットワーク)という次世代インターネット規格の公正な市場基盤の整備というものがあります。NGNは最先端の規格であるがゆえに、インフラ基盤や技術面で優位性をもつ事業者によって市場が固定化されてしまう恐れがあり、いかにして新興事業者の参入を促し、公正な市場を形成していくかが課題となります。この政策を推進するためには、関係事業者間との交渉、合意を得る必要があり、その交渉の最前線に、新人といえども参加し、長年の研鑽を積んできた事業者の方と堂々と議論をする事が求められます。こうした分不相応(?)な経験は、とても刺激的であると同時に、自身の成長の大きな原動力となっています。

## ■就職活動の経験から

就職活動における私の経験から教訓めいたものをお伝えするならば、それは「就職活動では、様々な価値観に触れる中で、自らの進路を、胸を張って選ぶとてほしい」ということです。

就職活動で触れた職業に対する様々な価値観はどれも魅力的で、進路決断には大いに迷いました。しかし、総務省という選択肢と出会

い、官庁訪問等で職員の方と話しをする中で、総務省の職員の方々の価値観が、自分の考える「軸」に最も合っていると心から納得することができ、自信を持って現在の職業を選びとりました。この経験が、社会人になった今、何より重要だと感じるのです。

失敗をし、自身の未熟さを痛感させられることはどの仕事であれよくあることです。責任の重さにたじろぐこともあります。その時に私を支えてくれるのが、「他でもなくこの仕事こそ、私が選びとった道だ」という経験です。この経験があるからこそ、困難があったとしても、自身の中で迷いやブレが生じず、ぶつかっていくことができるのだと思います。

皆さんも、就職活動では様々な価値観に触れ、大いに迷い、その中で心から納得のいく道を選びとってください。その結果、もし皆さんの選んだ道が総務省であるならば、それは私にとってこれ以上ない喜びです。



総務省フットサルサークル。会員大募集中！(筆者 下段中央)



課内にて(筆者 前列左)

## 経歴

平成21年 4月 総務省採用  
総務省消防庁国民保護・防災部防災課  
平成21年 8月 現職

## 「思い」を形にする職場

長崎県地域振興部市町振興課

梅本 祐子

「より多くの国民が幸せに暮らせる国にしたい。」

私が国家公務員を目指したのはそんな単純な理由でした。その思いを抱くと同時に、「東京生まれ東京育ちの私が、今まで生きてきた環境における経験だけで、『国民の幸せ』を国家公務員として語っていいのかわからない私」「東京での『幸せ』しか分からない私が『国民の幸せ』を実現しようとしても、机上の空論に終わってしまうのではないか。」という不安がありました。

説明会や官庁訪問で様々な省庁の話聞く中で、その不安を解消できると感じて選んだ職場が「総務省」でした。

## ■総務省の「人」

私が総務省なら不安を解消できると思った理由は、総務省の「人」にあります。就職活動をしていると、決め手は「人」という言葉をよく耳にしますが、総務省ほど「人」を大切に育て、成長させてくれる職場はないと思います。

総務省は、一年目から国民の声に近い現場で経験を積むことで、現場感覚を身につけ、現場の「思い」を持ち続ける機会を与えてくれます。それと同時に、繰り返される地方での勤務はもちろんのこと、他省庁での勤務、海外での経験という多様なキャリアを経験する機会により、総務省を外から客観的に見る目も育ててくれます。

総務省の仕事は「制度」という極めて抽象的なものを扱っていますが、このような多様なキャリアを経験することにより、机上の空論に終始しない「生きた」制度作りを行えるように、総務省は「人」を育てています。その結果、自分がありたい国家公務員像を体現している「人」に、総務省で出会うことができたと思います。

## ■「長崎」という「現場」

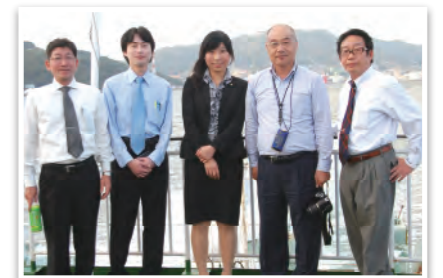
現場という言葉をよく耳にはしてはいたけれど、実際長崎県という現場に赴任してみてもうなのかということですが、想像以上に貴重な経験の嵐です。長崎県庁職員になって早くも半年が経とうとしています。昼夜・平日休日問わず驚きの連続で、刺激的な日々を過ごしています。

県庁では市町振興課というところで県内市町の財政に関する仕事をさせてもらっています。交付税など自治体にとって重要な財源に関する仕事に取り組むことで、たとえ一年目であっても仕事に対する責任とやりがいをもつことができます。また、県庁の先輩方の仕事に接する姿を通じて、県や市町の職員方の地元に対する思いの深さを直に感じることができます。業務外でも、キャンプに行ったりお祭りに参加したり新鮮な魚を食べたりと、長崎で目にするもの・耳にするもの…五感で感じるもの全てが勉強です。

今、長崎での生活を通して、東京にいただけでは絶対に味わえなかった「国民の幸せ」を肌で感じ、教えてもらっています。当然ながら、東京と長崎どちらの「幸せ」が正しいかとかではなく、「幸せ」は国民の数だけ多様に存在します。頭ではそんなの当然だと思っていたのですが、今自分の五感すべてでその多様性を体感しています。国民の多様性を肌で感じれば感じるほど、多様な「国民の幸せ」の実現を目指す国家公務員という職業の難しさを痛感します。しかし、その難しさを知ると同時に、「日本をもっと良い国にしたい」という現場の声を具体的に耳にすることで、「国民が幸せに思える国にしたい」という思いも強くなりました。そして、先輩たちから話に聞いていた現場感覚とは、今この瞬間に経験し、感じていること全てである、と実感しています。

## ■さいごに

総務省という職場は、このように1年目から現場感覚を身につけながら仕事をする中で、「アツイ思い」をよりアツイものにして、その思いを実現するために現在の課題に取り組む人間たちの集まりです。「思い」に年齢も性別も関係ありません。「思い」をぶつけることに遠慮する必要もありません。総務省の人は真正面からその「思い」を受け止めてくれます。今これを読んでいて、こんな日本にしたいという「アツイ思い」をもっているみなさんには、総務省は魅力的な職場の一つになると思います。ぜひその思いをぶつけに、総務省の門を一度叩いてみてください。「アツイ思い」をぶつけあえる未来の後輩と出会う日を心から楽しみにしています。



宇久島(佐世保市)にて(筆者 中央)



龍馬と